

「聖書は『ものみの塔』に属する本ですか」

1976年は日本語のライフライCDに入っていないので英語版からの引用です。(日本語版は1968年1月15日号43ページ9節)

*** w67 10/1 p. 587 p. 9 Finding Freedom with Jehovah's Visible Organization ***

Thus the Bible is an organizational book and belongs to the Christian congregation as an organization, not to individuals, regardless of how sincerely they may believe that they can interpret the Bible. For this reason the Bible cannot be properly understood without Jehovah's visible organization in mind.]—ものみの塔 [英語版] 1967年10月1日号の587ページ

日本語訳：

『それで聖書は組織の本であり、個人にではなく、一組織としてのクリスチャン会衆に属するものです。たとえ、個人的に聖書を解釈できると、誠実に信ずる人がいても、その事実は変わりません。

ゆえにエホバの見える組織を度外視して聖書を正しく理解することはできないのです。』

この一文は「エホバの組織とともに自由を見出す」という研究記事の「聖書は組織の本」という復見出しの中にあります。

「ここで言う「組織」という語は「エホバの見える組織」のことで、一般的な組織という意味ではないことは、このものみの塔誌の記述そのものでも明らかですが、ものみの塔の出版物（エホバの証人）が「組織」という言葉を使うとき、ものみの塔協会かエホバの証人の統治体を意味するもので、それ以外の何物をも意味していませんので、この文章が述べているのは、端的に言えばこういうことです。

「聖書はものみの塔に属する本であり、個人がどんなに真剣に研究しても決して正しく解釈することはできない。」

この主張を読んで、キリスト教の歴史に詳しい人は、あるいは現役の学生であれば、世界史の教科書の中に似たような記述があったのを思い出さるかもしれません。

そうです。正に、カトリックの教義と酷似というより、完全なパクリと言って良いでしょう。これに関連したカトリックの教義を簡単に述べておきますと、おおよそ、次のようなものです。

「聖書は個人で勝手に解釈してはならず、聖書の解釈はすべて聖なるカトリック教会から出なければならぬ」（マルティン・ルターの宗教改革の時代にローマカトリック教会が、宗教改革の動きをけん制するために出した宣言の内容）

先のものみの塔の記事と、このカトリックの教義が酷似していることは誰の目にも明らかです。エホバの証人がその歴史の中で一貫して最も批判してきたカトリック教会が、聖書の解釈の独占的な権威に関しては、全く同じ教義をエホバの証人のずっと前から教えていたことは何と皮肉なことでしょうか。

カトリックの考える真理の情報の流出経路は、「神→イエス・キリスト→使徒→正統後継者であるカトリック教会（司教／司祭／助祭）→一般信徒」となっています。

これは、人が真理の情報を得ようと思ったら、カトリック教会を通して以外に道がないことを意味しています。また、聖書についても、それが、多義性を持ったものであるため、その解釈権は、唯一カトリック教会だけが持ち、その他の人は、その正当な権利や権威がないとされます。カトリック教会は、ペテロの後継者であるとするローマ教皇を中心として形成される信者の集まりということになっています。

従って、カトリックの教会はその位階制度としての存在であり、教会の司祭などに関する権威はキリストによって直接与えられたものとみなされています。

ついでに、プロテスタントの見方も簡単に述べておきますと、プロテスタントでは教会は人間の作った組織と考え、民主主義的な特徴をもった組織によって運用され、教皇や教会の権威は認めていません。基本的に聖書中心主義とされており、聖書の解釈は個人の良心に任されます。

カトリックの教義の特徴は、聖書を聖書としたのは教会であるという考えです。

つまり聖書があつて教会があるのではなく、教会があつて聖書があると考えます。

このことから、ルターの宗教改革は、それまで聖書の解釈権をほぼ独占していたカトリックから、一般民衆の手に聖書を取り上げさせる運動でもあったということです。

さて、本題に戻りますが、聖書解釈独占権を主張して止まない態度の根底にあるのは何でしょうか。

聖書そのものの帰属に対する認識も、「聖書は神に属する」ではなく「聖書は我々に属する」という態度を作り上げてしまうものは何でしょうか。

その価値観の背後にあるのは唯ひとつ、統治権の掌握つまり、支配欲、権力欲しかないということです。

次に引用する、カトリック教会に関する、あるコラムニストの記述と、ものみの塔という組織を比較して見て下さい。

「宗教的ドグマを掲げた超国家的な官僚機構が、自ら政治権力として、或いは各地の政治権力と結びつきながら多様な国や民族に属する人々の思想や行動を統制する、という組織経営のしくみをつくり出した希有な宗教団体が、カトリック教会です。」

(*編者注：ドグマ【dogma】各宗教・宗派独自の教理・教義。)

「政治権力と結びついた」という点を除けば「多様な国や民族に属する人々の思想や行動を統制する、という組織経営のしくみをつくり出した希有な宗教団体」という表現はそのまま、「ものみの塔」に当てはまります。

冒頭に引用した「ものみの塔」の述べる「聖書は組織の本である」という論理は遥か昔からカトリックが主張していたことであり、ただ、エホバの証人こそ、その本家だという主張で、本家分家争いのような、醜く、稚拙な強奪戦を行なっているに過ぎないことが分かります。そこにはキリスト教の精神など、ひとかけらも見当たりません。